相次ぐ犠牲に怒り

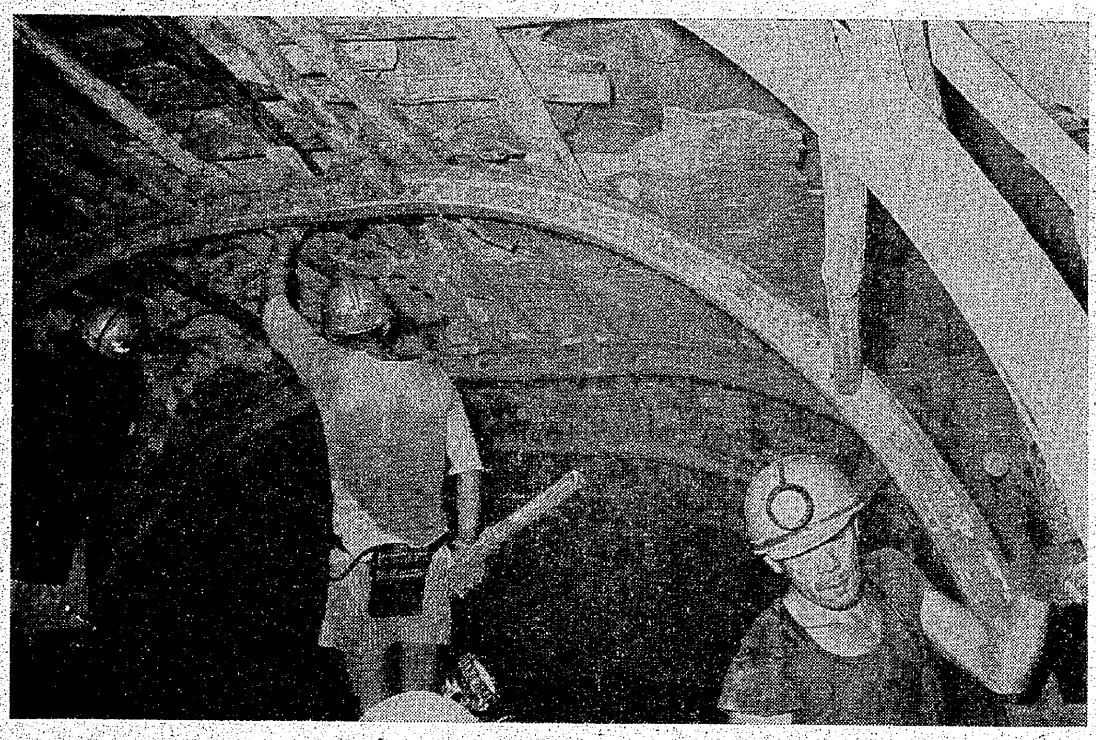
「ストで抗議せよ」職場

不安つのる矢先、この事故

会社は今年にはいってから早くも二人の労仂者のいのちを、坑底で奪い去った。主席係員の猿渡義長さん（三川鉱開発、四十四才）は、一月十八日坑底で作業中パンツアーコンベアーの原動機と側壁との間にはさまれた頭を真二つにうち割って死に、また新労組合員の田中博士さん（宮浦鉱採炭工、二十七才）は同月二十七日、同坑底の五十卸で作業中天井からソゲが落下、その下に埋まって死んだ。

ちょうど会社が「CO闘争も終った。なにがなんでも、これまでの減産分を取りもどそう」と、しゃにむに増産体制を押し出してきたときで、坑底に仂くすべての者が「また何かあるゾ」と、不安を大きくしていた矢先の犠牲で、もちろんその後の調査をまつまでもなく、会社の生産第一主義のために生じた保安対策上の手ぬかりが原因となっており、職場のそこかしこから、「犠牲者が職員組合員だ、新労組合員だなどと、もはや区別してはおれぬ。ストライキをうって抗議すべきだ」との声があがっている。

このような許されぬ犠牲に対して新労組・職組の両組合は、いつものようにこれといった反応を示さなかったが、三池労組としてはとりあえず、きびしく究明した調査事実にもとずき、ただちに本紙号外を通してその真相を訴えるとともに、三井鉱山に強く抗議した。



写真は、国民文化会議が派遣した絹川カメラマンがうつした飯野炭鉱の坑内の様子。三池の坑内もこれとまつたく同じであるが、何をおそれてか会社は、カメラマンばかりでなく、すべての報道陣を坑口にさえも寄せつけようとしない。三池の坑底で、どれだけの生命が奪われたことか。

ただごとではないゾ！ くろだいや新聞

くろだいや新聞（現地会社の社内報）の三、〇三六号（一月二十九日発行、タブロイド四ページ）はその一面に「出たゾ、二万五千百八トン。驚異の日産新記録、つづけようこの意欲と底力」の見出しをもって、三井三池で仂く全労仂者に「CO闘争は解決した。事故などによる出炭低下分を取りもどし、何が何でも三池炭鉱をもりたてるため、心機一転二万人全従業者が一丸となって増産にがんばろう」と呼びかけた。

同記事はその中でいっている。

「ついに驚異的な大出炭記録・日産二万五千トン（三池闘争まではせいぜい日産八千トンだったことと、くらべてほしい）が二十三日生まれた。三池炭鉱マンの意気は、まさに天をつくものがあり……」

さらに同記事の中で、うちつづく災害で重大責任を負っている倉岡三川鉱長はいっている。

「こんどの記録は……やればできるという実績をつくった点で意義は大きい」

他は略すが、この記事は、依然として人命軽視・生産第一主義の態度を棄てず、それどころか出炭低下の原因となったうちつづく災害の責任をさえ、かえって職場の労仂者になすりつけることによって、何がなんでも増産目標を実現しようと狂奔する三井鉱山の企図を、ズバリさらけ出したものとして注目にあたいする。

具体的な施策となって……

このことは会社の具体的な施策となって、各ヤマヤマに現われてきた。問題の三川鉱では、いまや職制が「CO闘争も終ったことだし、これからは職場規律を確立してやってもらうから」と公言し、また宮浦鉱では残業時間の延長、公休出勤を、たたかう力を骨抜きにされた新労組員に押しつけ、出勤督励を強め、しかもくりこみの時刻には軍艦マーチ、君が代行進曲、勝ってくるぞと勇ましく……などのレコード音楽を流して、坑底をめざす労仂者の生産意欲をあおっている。

「会社はもうこれまでの二万トン目標ではあきたらず、きっとむちゃくちゃなやり方で実現した二万五千トンを出炭目標として、押しつけてくるに違いないカゾ」――職場の仂く者はたれかれなしにこうおそれているが、実にまた仂く者を虫ケラとも思わぬ会社のこのような態度が、うちつづく大災害を生み、月々二百人以上の重軽傷者を生み出してきていることを思えば、増産への会社の新たな狂奔ぶりは、労仂者にとっていよいよただごとではなく、「三井はこのうえまたCO患者をつくるつもりか」と、職場に怒りがたぎっている。

解説

予測される"大災害"

会社新たな合理化提案

一月三十一日、三川鉱大爆発後の協定にもとづいて開催された生産会議の場で、会社側はさらに労仂者に労仂強化を強制せずにはいない非道な内容の、新たな合理化案を提示してきた。すでにその詳細は号外をもって伝えたのでここには略すが、合理化は昭和三十四年一月の第二次合理化提案から四度目に当たり、まさに第四次合理化ということができ、内容はこれまでのものに劣らずはげしい攻撃となって荒れ狂うことが予測される。

これについて立山次長はつぎのように警告する。

「これまでの経験からして、どんどの合理化もまた会社側に大もうけをもたらすだろうが、絶対に労仂者にしあわせをもたらすことにはならない。それどころか、会社の言にだまされて合理化をうのみにするようなことにでもなればこれまでがそうであったように、またまた悲惨な目を見ることにきまっている。これからは新労幹部の新たな裏切り行為をとくに警戒し、新労組合員や組夫のみなさんと十分話し合い、どう闘うかの準備をすることがまず大切。予測される大災害を未前に防ぐ方法は、それしかない」

何がねらいか

三池労組を中傷する新労の号外

炭労・三池労組がこれからCO闘争をすすめるとき、戦線整備を行うための仮調印をやり、新たな決意を固めようとしているとき、三池新労は一月三十一日付号外を

もって市民に対し、「すでにCO闘争のすべては終った」として、「これからもひきつづき、民主的労仂運動をすすめる三池新労に、変らざるご協力をお願いします」と呼びかけた。

記事の中で新労幹部は「三池労組幹部は遺族やCO患者を利用して無謀な紛争をつづけ、生産を阻害し、いたずらに問題解決を遅らせた」と中傷しているが、このような新労幹部の態度は、果たしてなにをねらってのことか。会社の新たな合理化提案とあわせて考えるとき、注目すべきことである。

詩　さけび

臼井社宅　平田千佐子

米軍の空母が
太平洋の血の海を越え
またも佐世保に入港
そこで国民全部が起こした
反対運動
五日間の休暇を終え
泣く泣く　死の空母
エンタープライズに帰った
米軍兵士たち
明日はどこの戦場へ
目指すのか
『もう戦争はごめんだ』
遠い沖縄島も
平和を求めて叫んでいる
戦争反対
私たち日本人は
しあわせに生きる
権利があるのだ

私の書棚

労仂者の魂の記録

誇り高く生きた荒賀君『なかまの星』

ことしのメーデーの前日、仲間たちから"たわし"と愛称された国鉄の若い労仂者が、火災事故に会い、翌日死にました。その若者は大やけどを負いながら「あすのメーデーには参加できないかもしれない」「南ベトナム解放戦線の旗と竹ざおは当直の前にあるから持っていってくれ」と組合のことばかり心配していました――。

若者の名は荒賀敏巳（24）。国労宮原電車区分会青年部副部長でした。仲間たちは、労仂者として誇り高く生きた彼をしのんで『なかまの星』を出版したのです。彼は、最初からすばらしい活動家だったわけではありません。友だち思いで、義理がたい正義漢でしたが、宮原電車区に勤めはじめたころは赤いシャツに細い白ズボンというかっこうの"おあにいさん"連日パチンコ、バー通いで、チンピラとけんかしたりする「ゴン太野郎」だったのです。職場のサークルへ参加するようになり、女性もおおぜい参加する交流会でエッチな冗談も飛ばしてみんなを笑わせながら、彼は仲間の悩みや苦しみの原因をつかんでいきました。きびしい「合理化」攻撃、分裂攻撃は彼の労仂者魂をきたえ、組合推薦で労仂学校にも通い、職場新聞活動の中心メンバーとして活躍するようになったのです。

『なかまの星』は彼を知る友人や、恋人、家族の手記を集め、ひとりの労仂者の人間像とその変革の歴史をくっきり浮かび上がらせています。日本のすべての労仂者に未来のにない手が大ぜい育っていることを知らせ、若者には力強い励ましと感動を与えるでしょう。（申し込み先＝大阪市福島区吉野町二―二三日本機関紙協会大阪支部・二七〇円・送料五〇円）